

目次

はじめに……………二

寄せ場とは何か……………山岡強一……………四

寄せ場での斗い・パート1……………風間竜次……………二〇

      釜共・現斗時代……………

寄せ場での斗い・パート2……………宗村義隆……………四二

      日雇共斗から日雇全協へ……………

資料1. 寄せ場とは何か……………六四

資料2. 釜共・現斗時代……………六六

資料3. 日雇共斗から日雇全協の結成へ……………七二

## はじめに

「三多摩山谷（やま）の会」は、八三―八四山谷越冬斗争を支援するなかから、生まれた労働者（組合をふくむ）、市民、学生から成る組織である。だが、越冬支援から直接的に創られたわけではない。その後、ちょっとした経緯がある。その最初の節目は、三・一八集会だ（八四年）。これは、山谷地区からはるか遠く離れた三多摩地域（東京郊外）においても、なんらか、山谷―寄せ場の動きに連っていきたい、という希いにもとづいて開かれたものであった。折しも、八三年一月三、四日対右翼暴力団（西戸組・皇誠会）斗争で弾圧された被告一二人全員が、保釈された（一五、一七両日）直後で、七〇名もの多数が集まり、連帯―祝賀の気分はサイコーに盛り上った。ヤマの当該の主要メンバーが逮捕・起訴・拘留され、残った若いひとたちを軸に支援ともども越冬斗争をたたかい、ついに被告をシヤバに奪還した、という感慨しきりであったのだ。三多摩の支援の側としては、松沢哲成が「天皇の死んだ日―明治、大正、そして……」というテーマで歴史上の経過を、事実をもって明らかにする話（詳しいレジュメも出た）をするとともに、八三―八四山谷越冬斗争の八ミリ映画を上映した。

学習会の話が出たのは、三・一八集会の総括のときであった。初めは、ホンの偶然といった形で話題に上ったのだが、ことが決まればきわめて事務的に、パッパッとことの進行するのが、我が三多摩、山谷の会の作風（？）なのだ。とりあえず、次に「寄せ場連続学習会への参加の呼びかけ」文を掲げる。

「三多摩に住み、あるいは働くすべての皆さん！  
日夜闘うすべての仲間たち！

私たち「三多摩山谷の会」は、寄せ場の日雇労働者の実情ならびに闘いについて「連続学習会」を、スライドまたは映画つきで行いますので、ぜひ多数参加されるよう訴えます。

すでにご存知のように、東京・南千住の山谷や大阪・釜ヶ崎などは簡易宿泊所（通称ドヤ）の密集している所で、日雇労働者がそこでヤミ手配師などから日日の仕事を獲得する地区です。彼らはそこから出発して、ときには飯場に入り現場でも土木建築関係などのきびしい肉体労働に従事しています。日本内外における資本主義の最近のカゲリの影響を直接的に受けて、しばしば仕事にありつくことが出来ません。不況は、この社会の中で一番恵まれない部分に、もつともつらく当たっていると考えると思います。そういう状況の中で、寄せ場労働者たちは何を考え、どういった方向を目指しているのだろうか。

現在山谷の中では、労働者収奪をいっそう強化しようとしてヤクザが右翼の看板（西戸組・皇誠会）をかかげて登場し、戦闘的な労働者や労働運動家を武装襲撃するという事態が、昨年来つづいています。寄せ場における天皇主義右翼の出現は、日本社会の右翼化と切り離せないものであると同時に、近い将来そのファシズム化への予兆でもあるのではないのでしょうか。争議団運動を担う部分は、百七十日余に及ぶ対皇誠会斗争に勝利しつつあります。七〇年代前後から今日に到る、山谷や釜ヶ崎における闘いはど

のような内実を持っていたのだろうか。私たちは、私たち自身が三多摩に生き斗う為にこそ、彼らの現在および過去の斗いに学んでいく必要があるのではないのでしょうか。

横浜・寿における日雇労働者虐殺に見られるような極端な差別と排外性を、私たちは根絶させなければならぬと考えます。私たちひとりひとりのなかにも抗いがたく存在する差別・排外的な考え方を克服していくとともに、家庭や地域、職場、あるいは公教育体系に巣食っている優劣の振り分けや権威主義といった小天皇制秩序をも解体させていく努力が切に求められていると思います。寄せ場労働者に対する差別視は、市民社会全体を貫くその反映であるとともに、その凝縮形態に他なりません。だがそれは、寄せ場と市民社会の関係のひとつの表われにすぎません。それでは、総じて寄せ場（労働者）と市民社会の関係は、どのようなものとしてとらえられるのだろうか。

以上が、おおよそ私たち三多摩山谷の会の持っている問題意識であり、寄せ場労働運動家や研究者を講師に招いて連続学習会を開こうとする理由です。圧倒的結集を呼びかけます。

— 一九八四年四月 —

学習会は、第一回が五月一二日、講師山岡強一氏（元現斗委。山谷争議団）。第二回が六月九日、講師風間竜次氏（元釜共斗。日雇全協議長）。第三回が七月一四日、講師宗村義隆氏（元山日労。日雇全協事務局長）。第四回が八月一日、講師青木秀男氏（広島修大教員、都市社会学専攻）。いずれも、三〇〜五〇名程度の参加者を得て、密度の高い話がなされた。そうした成果の上に立って、フィナーレを飾るべく、フィルム構成、ロック・ミュ

ージック、パネル・ディスカッション、そして金石範（キム・ソクボム）氏の講演を、八月二六日午後から夜にかけて一挙に展開したのだった。それぞれ十分な時間をかけられなかった憾みは残るけども、金氏とか、パネラーの山田真氏（医者）とかを初め、数多くの未知、既知の人々との新しい出会いを楽しむことができたことだけは、確かであろう。

現在、三多摩・山谷の会は、支援として、八四―八五年山谷越冬斗争の準備に精力的に取り組んでいる。今回、第一〜三回の分だけを取りだし急遽パンフレットとして刊行するのも、その準備の一環に他ならない。多くの人々や団体が、寄せ場について学習する一助とされるよう、切に希望する。

青木氏の講演、八・二六のパネル・ディスカッション、金石範氏講演についても、引きつづき何らかの形で、公けにしたいと考えている。乞御期待。

一九八四年一月二三日（金）

三多摩・山谷の会